

わかれ道

樋口一葉

青空文庫

上

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとと羽目を敲く音のするに、誰れだえ、
 もう寐てしまつたから明日来ておくれと嘘を言へば、寐たつて宜いやね、起きて明けてお
 くんない、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、嫌な子だねこんな遅くに何を言
 ひに来たか、又御餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛棒おしと言ひながら、
 仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十余りの意気な女、多い髪の毛を忙がしい折か
 らとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の台なしな半天を着て、急ぎ足に沓
 つぬぎ 脱へ下りて格子戸に添ひし雨戸を明くれば、お気の毒さまと言ひながらずつと這入るは
 一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て余しの小僧なり、年は十六なれど
 も不図見る処は一か二か、肩幅せばく顔少さく、目鼻だちはきりきりと利口らしけれど何
 にも脊の低くければ人嘲けりて仇名はつけける。御免なさい、と火鉢の傍へづかづかど行
 けば、御餅を焼くには火が足りないよ、台処の火消壺から消し炭を持つて来てお前が
 勝手に焼てお喰べ、私は今夜中にこれ一枚を上げねば成らぬ、角の質屋の旦那どのが御年

始着だからとて針を取れば、吉はふふんと言つてあの 元頭はげあたまには惜しい物だ、御初穂を我れでも着て遣らうかと言へば、馬鹿をお言ひで無い人のお初穂を着ると出世が出来ないと云ふでは無いか、今つから延びる事が出来なくては仕方が無い、そんな事を他処よその家でもしては不用いけなよと気を付けるに、己れなんぞ御出世は願はないのだから他人ひとの物だらうが何だらうが着かぶつて遣るだけが徳さ、お前さん何いつかさう言つたね、運が向く時に成ると己れに糸織の着物をこしらへてくれるつて、本当に調こしらへてくれるかえと真面目まじめだつて言へば、それは調らへて上げられるやうならお目出度めでたいのだもの喜んで調らへるがね、私わたしが姿を見ておくれ、こんな容よう躰たいで人さまの仕事をしている境きよう界がいでは無からうか、まあ夢のやうな約束さとして笑つていれば、いいやなそれは、出来ない時に調らへてくれとは言は無い、お前さんに運の向いた時の事さ、まあそんな約束でもして喜ばして置いておくれ、こんな野郎が糸織そろへを冠かぶつた処ところがをかくも無いけれども淋さびしさうな笑顔をすれば、そんなら吉ちゃんお前が出世の時は私にもしておくか、その約束も極めて置ききたいねと微笑ほほんで言へば、そいつはいけない、己れはどうしても出世なんぞは為しないのだから。何な故げ々々ぜ。何故なでもしない、誰れが来て無理やりに手を取つて引上げてお己れは此処ここにかうしているのが好いのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ、どうで盲目めくらじま縞つの筒袖つつそでに三尺を

脊負つて産て来たのだらうから、浚を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一本も当りを取るのが好い運さ、お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾に成ると言ふ謎では無いぜ、悪く取つて怒つておくんなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎くに、さうさ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからね、とお京は尺を杖に振返りて吉三が顔を守りぬ。

例の如く台処から炭を持ち出して、お前は喰ひなさらないかと聞けば、いいえ、とお京の頭をふるに、では己ればかり御馳走さまに成らうかな、本当に自家の吝嗇ぼうめやかましい小言ばかり言ひやがつて、人を使ふ法をも知りやあがらない、死んだお老婆さんはあんなのでは無かつたけれど、今度の奴等と来たら一人として話せるのは無い、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、随分厭味に出来あがつて、いい気の骨頂の奴では無いか、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりはどうしても主人とは思はれない番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいよと話しながら、金網の上へ餅をのせて、おお熱々と指先を吹いてかかりぬ。

己れはどうもお前さんの事が他人のやうに思はれぬはどういふ物であらう、お京さんお

前は弟といふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人娘で同胞なしだから弟にも妹にも持つた事は一度も無いと云ふ、さうかなあ、それではやつぱり何でも無いのだらう、何処からかかうお前のやうな人が己れの真身の姉さんだとか言つて出て来たらどんなに嬉しいか、首つ玉へ囁り付いて己れはそれぎり往生しても喜ぶのだが、本当に己れは木の股からでも出て来たのか、遂いしか親類らしい者に逢つた事も無い、それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事が出来ない位なら今のうち死んでしまつた方が氣樂だと考へるがね、それでも欲があるから可笑しい、ひよつくり変てこな夢何かを見てね、平常優しい事の一言も言つてくれる人が母親や父親や姉さんや兄さんの様にはれて、もう少し生きてゐやうかしら、もう一年も生きてゐたら誰れか本當の事を話してくれるかと楽しんでね、面白くも無い油引きをやつてゐるが己れみたやうな変な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も父親も空つきり当が無いのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れはどうしても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたたきつつ例も言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前笹づる錦の守り袋といふ様な証拠は無いのかえ、何か手懸りは有りさうな物だねとお京の言ふを消して、何そんな氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなどと朋輩の奴等が

悪口をいふが、もしかするとさうかも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も父親も乞食かも知れない、表を通る檻樓を下げた奴がやつぱり己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跣片眼のあの婆あ何か己れの為の何に当るか知れはしない、話さないでもお前は大底しつてゐるだらうけれど今の傘屋に奉公する前はやつぱり己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本当に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつてはくれないだらうか、振向いて見てはくれまいねと言ふに、串談をお言ひでないお前がどのやうな人の子でどんな身かそれは知らないが、何だからとつて嫌やがるも嫌やがらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟がどうだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故そんな意気地なしをお言ひだと励ませば、己れはどうしても駄目だよ、何にも為やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。

中

今は亡せたる傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆さま有りき、六年前の冬の事寺参りの帰りに角兵衛の子供を拾ふて来て、いいよ親方からやかましく言つて来たらその時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地悪が置ざりに捨てて行つたと言ふ、そんな処へ帰るに当るものか少とも怕かぬ事は無いから私が家に居なさい、皆も心配する事は無い何のこの子位のもの二人や三人、台所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入る物か、判証文を取つた奴でも欠落をするもあれば持逃げの吝な奴もある、了簡次第の物だわな、いはば馬には乗つて見ろさ、役に立つか立たないか置いて見なけりや知れはせん、お前新網へ帰るが嫌やなら此家を死場と極めて勉強をしなけりやあ成らないよ、しつかり遣つておくれと言ひ含められて、吉や吉やとそれよりの丹精今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻歌交り遣つて除ける腕を見るもの、さすがに目鏡と亡き老婆をほめける。

恩ある人は二年目に亡せて今の主も内儀様も息子の半次も気に喰はぬ者のみなれど、此処を死場と定めたるなれば厭やとて更に何方に行くべき、身は疝癩に筋骨つまつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるるも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さを喰たであらう、ざまを見ろ廻りの廻りの小仏と朋輩の鼻垂れに仕事の上の仇を返されて、鉄

拳に張たほす勇氣はあれども誠に父母いかなる日に失せて何時を精進日とも心得なき身
 の、心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠かれて大地を枕に仰向き臥してはこぼるる涙
 を呑込みぬる悲しき、四季押とほし油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の玉の様な子
 だと町内に怕がられる乱暴も慰むる人なき胸ぐるしきの余り、仮にも優しう言ふてくれる
 人のあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり。仕事屋のお京は今年の春より
 この裏へと越して来し者なれど物事に気才の利きて長屋中への交際もよく、大屋なれば
 傘屋の者へは殊更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころびでも切れたなら私の家へ
 持つてお出、御家は御多人数お内儀さんの針もつていらつしやる暇はあるまじ、私は常住
 仕事畳紙と首つ引の身なれば本の一針造作は無い、一人住居の相手なしに毎日毎夜さびし
 くつて暮しているなれば手すきの時には遊びにも来て下され、私はこんなながらがらした気
 なれば吉ちやんの様な暴れ様が大好き、疔癩がおこつた時には表の米屋が白犬を擲ると思
 ふて私の家の洗ひかへしを光沢出しの小槌に、礎うちでも遣りに来て下され、それならば
 お前さんも人に憎くまれず私の方でも大助り、本に両為で御座んすほどにと戯言
 まじり何時となく心安く、お京さんお京さんとして入浸るを職人ども翻弄ては帯屋の大
 将のあちらこちら、桂川の幕が出る時はお半の脊中に長右衛門と唱はせてあの帯の上

へちよこなんと乗つて出るか、此奴こいつは好いお茶番だと笑はれるに、男なら真似まねて見ろ、仕事やの家へ行つて茶棚の奥の菓子鉢の中に、今日は何が何箇いくつあるまで知つてゐるのは恐らく己れの外には有るまい、質屋の元頭はげあたまめお京さんに首つただけで、仕事を頼むの何がどうしたのと小五月蠅こうるさくはいりこ這入込んで前だれの半襟はんえりの帯つかはのと附届つけとどけをして御機嫌を取つてはいるけれど、遂ついひしか喜んだ挨拶あいさつをした事が無い、ましてや夜中でも夜中でも傘屋の吉が来たときへ言へば寝間着のまま格かうしど子戸を明けて、今日は一日遊びに来なかつたね、どうかお為しか、案じていたにと手を取つて引入られる者が他ほかに有らうか、お気の毒ど様なこつたが独活うどの大木たいぼくは役にたたない、山椒さんしよは小粒で珍重されると高い事をいふに、この野郎めと脊せを酷ひどく打たれて、有がたう御座いますと済まして行く顔つき背せいさへあれば人串ぢようだん談だんとて免ゆるすまじけれど、一寸法師の生意気と爪つまはちきして好い鬨なぶりものに烟た草ば休しみの話しの種成たねなき。

下

十二月三十日の夜よ、吉は坂上の得意場あつちへ誂あつちへの日限おくの後れしを詫わびに行きて、帰りは懐ふ

手ての急ぎ足、草履下駄の先にかかる物は面白づくに蹴けかへして、ころころと転げると
 右に左に追ひかけては大溝おほどぶの中へ蹴落して一人からからの高笑ひ、聞く者なくて天上の
 お月さまさも皓々こうこうと照し給たまふを寒いと言ふ事知らぬ身なれば只ただこちよく爽さわやかにて、帰りは
 例の窓を敲たたいてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後あとより追ひすがる人の、両手に目
 を隠して忍び笑ひをするに、誰れだ誰れだと指を撫なでて、何だお京さんか、小指のまむ
 しが物を言ふ、恐赫おそろしても駄目だよと顔を振のけるに、憎くらしい当てられてしまつたと
 笑ひ出す。お京はお高僧頭巾目深こそづきんまぶかに風通ふうつうの羽織着て例いづもに似合ぬ宜よき粧なりなるを、吉三は見
 あげ見おろして、お前何処どこへ行きなすつたの、今日明日は忙まがしくてお飯まんまを喰べる間もあ
 るまいと言ふたでは無いか、何処へお客様にあるいてゐたのと不審を立てられて、取越し
 の御年始さと素知らぬ顔をすれば、嘘うそをいつてるぜ三十日の年始を受ける家うちは無いやな、
 親類へでも行きなすつたかと問へば、とんでも無い親類へ行くやうな身に成つたのさ、私
 は明日あすあの裏の移ひっこし転あをするよ、余あんなりだしぬけだからさぞお前おどろくだらうね、私も少
 し不意なのでまだ本当とも思はれない、ともかく喜んでおくれ悪い事では無いからと言
 ふに、本当か、本当か、と吉は呆あきれて、嘘では無いか串談じょうだんでは無いか、そんな事を言つて
 おどかしてくれなくても宜いい、己れはお前が居なくなつたら少しも面白い事は無くなつて

しまふのだからそんな厭いややな 戯じやうだん言ことは廃やしにしておくれ、ゑゑつまらない事を言ふ人だと頭かしらをふるに、嘘うそでは無いよ何時いつかお前まへが言ことつた通り上等じやうとうの運うんが馬車ばしやに乗のりつて迎むかひに来きたといふ騒さわぎだから彼あつこ処この裏うらには居ゐられぬ、吉きちちやんそのうちに糸織いとおりぞろひを調こしらへて上うよと言いへば、厭いややだ、己おれはそんな物は貫つらひたく無い、お前まへその好このい運うんといふはつまらぬ処ところへ行いかうといふのでは無ないか、一おとと昨日ひうち自家じやの半次はんじさんがさういつてゐたに、仕事しごとやのお京きやうさんは八百屋横町やちやうに按摩あんまをしてゐる伯父おやじさんが口入くちいれで何処どこのかお邸やしきへ御奉公ごほうこうに出いるのださうだ、何なにお小間使こまぢひと言いふ年としではなし、奥おくさまの御側ごせやお縫物ぬいものの訳わけは無ない、三さんつ輪りんに結むすつて総ふさの下さつた被布ひふを着めるお妾めかけさまに相違さかは無ない、どうしてあの顔かほで仕事しごとやが通とせる物ものかとこんな事をいつてゐた、己おれはそんな事は無いと思おもふから、聞違きかひだらうと言いつて大喧嘩おほげんくわを遣やつたのだが、お前まへもしや其処そこへ行いくのでは無ないか、そのお邸やしきへ行いくのであらう、と問とはれて、何なにも私わたしだとして行いきたい事は無いけれど行いかなければ成ならないのさ、吉きちちやんお前まへにももう逢あはれなくなるねえ、とて唯ただいふ言ことながら萎しほれて聞きゆれば、どんな出世しゅっせに成なるのか知らぬが其処そこへ行いくのは廃やしたが宜よからう、何なにもお前まへ女口めぐち一つ針仕事はりしごとで通とせぬ事こともなからう、あれほど利きく手てを持つてゐながら何故なにゆゑつまらないそんな事を始めたのか、余あんまり情なさけないでは無ないかと吉きちは我が身の潔白けつぱくに比ひべて、お廃やしよ、お廃やしよ、断ことわつておしま

いなと言へば、困つたねとお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張に倦あきが来て、もうお妾でも何でも宜よい、どうでこんなつまらないづくめだから、寧いっその腐れ縮ちりめん緬めん着物で世を過ぐさうと思ふのさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つてほほと笑ひしが、ともかくも家へ行かうよ、吉ちやん少しお急あぎと言はれて、何だか己れは根つから面白いとも思はれない、お前まあ先へお出いよと後あとに附いて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋の路次を入つてお京が例の窓下に立てば、此処をば毎夜音づれてくれたのなれど、明日あすの晩はもうお前の声も聞かれない、世の中つて厭いややな物だねと歎たん息そくするに、それはお前の心がらだとして不満まんらしい吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈らんぶに火を点うつして、火鉢を搔かきおこし、吉ちやんやお焙あたりよと声をかけるに己れは厭いややだと言つて柱きは際に立つてゐるを、それでもお前寒からうでは無いか風を引くといけないと気を付ければ、引いても宜よいやね、搦かまはずに置いておくれと下を向いてゐるに、お前はどうかおしか、何だか可怪をかしな様子だね私の言ふ事が何か疝かんにでも障つたの、それならそのやうに言つてくれたが宜よい、黙つてそんな顔をしてゐられると氣に成つて仕方が無いと言へば、氣になんぞ懸いけなくても能よいよ、己れも傘屋の吉三だ女のお世

話には成らないと言つて、寄かかりし柱に脊を擦りながら、ああつまらない面白くない、己れは本当ほんとに何と言ふのだらう、いろいろの人がちよつと好い顔を見せて直様すぐさまつまらない事に成つてしまふのだ、傘屋の先せんのお老婆ばあさんも能い人で有つたし、紺屋こうやのお絹ぬいさんといふ縮れつ毛の人も可愛かあゆがつてくれたのだけれど、お老婆さんは中風ちゆうふうで死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを嫌やがつて裏の井戸へ飛込んでしまつた、お前は不人情で己れを捨てて行し、もう何もかもつまらない、何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美ほうびの一つも出やうでは無し朝から晩まで一寸法師の言いはれつづけで、それだからと言つて一生立つてもこの背せいが延びやうかい、待てば甘露かんろといふけれど己れなんぞは一日一日嫌やな事ばかり降つて来やがる、一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾めかけに出るやうな腸はらわたの腐つたのでは無いと威張つたに、五日とたたずかぶとに兜かぶとをぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、欲の深いお前さんを姉ねえさん同様に思つてゐたが口惜しい、もうお京さんお前には逢はないよ、どうしてもお前には逢はないよ、長々御世話さま此処からお礼を申ます、人をつけ、もう誰れの事も当てにする物か、左様なら、と言つて立あがり杳くつぬぎの草履下駄ひき足に引かくるを、あれ吉ちやんそれはお前勘違ひだ、何も私が此処を離れるとてお前を見捨てる事はしない、私は本当ほんとに兄弟とばか

り思ふのだものそんな愛想あいそづかしは酷ひどからう、と後から羽がひじめに抱き止めて、気の早い子だねとお京の諭さとせば、そんならお妾に行くを廃やめにしなさるかと振かへられて、誰れも願ふて行く処では無いけれど、私はどうしてもかうと決心してゐるのだからそれは折角だけれど聞かれないよと言ふに、吉は涕なみだの目に見つめて、お京さん後生だから此ここ肩の手を放しておくんない。

青空文庫情報

底本：「こぼりえ・たけくらべ」新潮文庫、新潮社

1949（昭和24）年6月30日発行

2003（平成15）年1月10日116刷改版

2005（平成17）年5月20日126刷

初出：「国民之友 二百七十七号」

1896（明治29）年1月4日

※底本巻末の編者による語注は省略しました。

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

入力：岡村和彦

校正：Juki

2017年3月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

わかれ道

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>